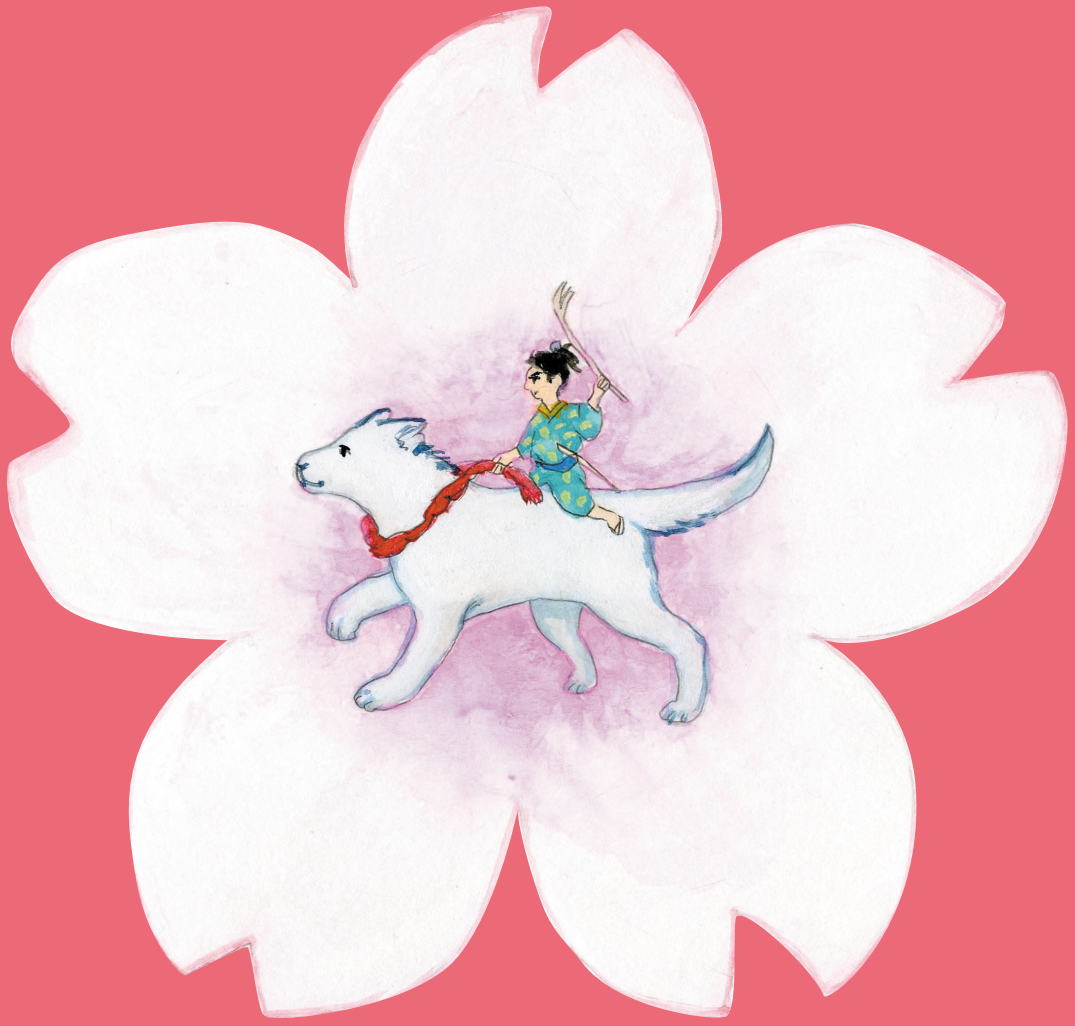
伏見の昔話

一寸法師



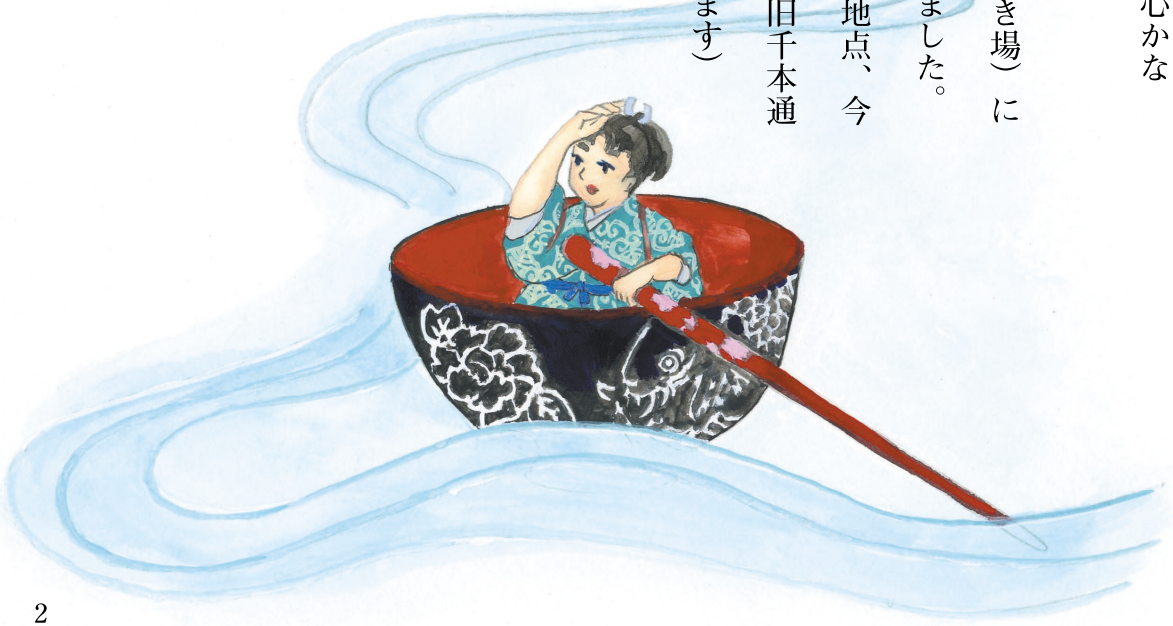
伏見の昔話を掘りおこす会

むかし、大阪、難波（なにわ）の里に、
おじいさんとおばあさんが住んでいました。
おばあさんは子供がいないのを悲しみ、
毎日、住吉神社に「わたしたちに子どもを
授けて下さい」とお参りしたそうな。
あわれに思った住吉大明神（すみよしだいみょうじん）さんが、
二人に子どもを授けてくださり、男の子が
生まれましたが、背が一寸ほどしかなく、
一寸法師と名づけたそうな。
二人は大切に育てたけれど、一寸法師は
大きくならず、おじいさんとおばさんは
嘆き悲しみました。
一寸法師は強くなりたいと思い、家を出て
都へ上る決心をします。

一寸法師は、おばあさんに針をもらって刀にし、麦わらを刀の鞘にしました。そして、おわんを舟に、お箸をカイにして、おわんの舟に乗り込み、住吉の浦より、いざ都へと淀川を上って行きました。

住みなれし難波の浦を立ちいでて
都へいそぐ我が心かな

やがて、伏見の鳥羽の津（船着き場）に着いた一寸法師は都へ上って行きました。（鳥羽の津は、桂川と鴨川の合流地点、今の横大路草津町あたり。都へは、旧千本通りを通っていったと伝えられています）



歩きつかれた一寸法師の前に立派なお屋敷が見えました。

そこは、三条の宰相殿という貴族のお屋敷でした。

一寸法師「たのもう」

宰相殿「どなたかな、おもしろき声の主は。声がしたと思ったが、姿がなきとは、はてさて」

一寸法師「下を、足元をご覧くだされ」

一寸法師を見つけられた宰相殿は、「これはおもしろき者」とお笑いになりました。

一寸法師は、宰相殿の姫君のお付きとなり、楽しく過ごしていたのですが、継母のいじめに悲しまれる姫君を見て、「姫様、難波の里の住吉大明神に行かれてはいかがでしょう」と誘い、二人で鳥羽の津より舟に乗り込み、難波の里をめざしました。

そのうち、たいそうきつい風が吹いて、二人の乗った舟は、風変わりな島へと流れつきました。

島には人が住んでいるようには見えません。気味悪く思っていると、どこからともなく鬼が二人あらわれました。

鬼は打ち出の小槌を持っていました。

「なんとちいさい奴じゃ、呑み込んでしまえ」「女房は連れてまいろう」

鬼の口に呑み込まれた一寸法師は、鬼の眼から飛び出しました。

「こやつめ」と鬼がふたたびパクリと呑み込むと、

一寸法師は針の刀でチクリ、チクリ、鬼の体の中であばれまわりました。

「いたたたあ、こりゃたまらん」と鬼は一寸法師を吐き出しました。

「こりゃあ、ただものじゃあない」と鬼は逃げていきました。

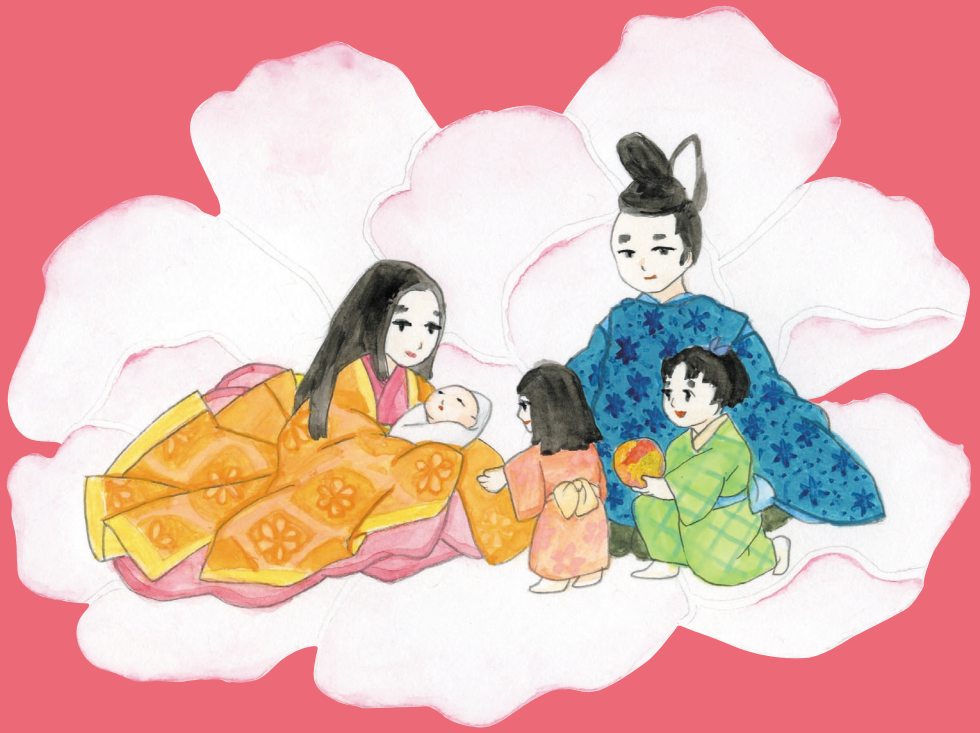
鬼が去った後には、打ち出の小槌が捨ててありました。それを拾い上げた一寸法師が「わが背よ、大きくなあれ」とふると、たちまち大きくなりました。

打ち出の小槌をふると、おいしいごはんもでました。そして金銀財宝も出てきました。それを持って姫君とともに、伏見の鳥羽の津に帰り、都へ上って行きました。

五条に宿をとっているときに、一寸法師の噂を耳にした帝が「一度会ってみたいものじゃ」と言って宮中に呼び、素性を尋ねられたそうな。

一寸法師のおじいさんは、堀川の中納言の子どもで、おばあさんは、伏見の少将の子どもであることがわかり、一寸法師の心にも卑しいところがないので、殿上へ呼ばれ、堀川の少将になることを認められたそうな。

その後、中納言に出世した少将殿（一寸法師）は、3人の子どもも授かり、めでたく栄えたということです。



伏見の昔話・第１集 『一寸法師』

編集・発行　伏見の昔話を掘りおこす会
イラスト　上　垣　清　美
連　絡　先　電話・FAX 075・622・8144（稲継）

●「伏見の昔話を掘りおこす会」STAFF募集！ ●「伏見の昔話を掘りおこす会」は伏見区役所が主催する『伏見をさかなにざっくばらん』に参加するプロジェクトです。